青山御流 活花手引種前篇 五

○艸木剪時手當囲方之事

○艸之類夏より秋迄ハ。別而朝に。花葉之露有内剪採
遅し。又夕方涼しくは。葉に夜露帯る頃よし。日光昇り
露乾て後剪取しハ。花葉痛て久く保ず。木之類迄も同
断也。売物用之枝葉ハ足坐に除去て。逆に根本より清
水を灌かけ。席に編ミハ風涼しく水気有土地。又板間杯
ニ。水餅変縮ミ瓶類抔に根本を擁へ涼しく活置べし。一旦
水揚きらバ昼之間ハ水気有冷る所へ。花を揃へ擁を
あて。暫く置もよし。但秋葉青葉抔に。折し露を灌ぎ。枝葉
乾ず保程。又むれざる様不藩く覆ひ置もよし。熱る六七月
之艸花ハ。昼中。亦風有節抔ハ。自花葉乾て。水揚悪る故

床に飾らんに。手当と。上に如くして。挿して置べし。尤暑氣
火氣(くわき)煙(けふり)杯の。多くむれざる所へ囲(かこい)置べし　右二枝三枝の揃ハ茶手桶花杯に活水を
野へ花詰ハへねもりて葉様を重ね活色ミ
移りて水多き瓶へ移へ弥数日保なり
○杜若。花菖蒲。あやめ。いちはつ。檜扇杯ハ。花滴(う)ハ。生ふ
同じ。始終真直(ますぐ)に立(たて)て。活立べし。斜(しやう)く横(よこ)く立時ハ。花首
曲り易くバ。花を背(そむけ)て笑へし。よく揃く並(ならべ)く。細き竹樸(むくな)の枝
揃ひ。直なるに。引さし紙にて。打藁(ちわら)にて。ゆるく結つけ。水
深く活置べし。尤曲りて面白き節なあれ共。大概(たいがい)ハ悪(あ)し
く癖付(くせつく)也。葉も一旦。水揚でバ。結りして形を打へし
○仙翁。撫子。がんひ花類。或杜若。花菖蒲。百合(ゆり)杯。花開きら
花の際に。水を灌(そそ)ぎ。亀(かめ)ぐりし淡。若露を帯ひね。速(ちとのか)に振り

拂ふ盛し。杜若類ひ花に露あれバ。取落る肉とめ易く。せん
ぎりの類ハ。色損じ。百合ハ。蘂類花に。こぼるみ。水仙ハ。花
重く。類傾しとなり。生葉類ハ。水を折べし。是らの花ハ。
ほそぼそたるハ格別。開ハ。露ちらいて後。蕾採るべし 但芍ハ花蕾の早まり
おるゆく活せ候なし是ハ花屋まそ摘みの候え
○冬より初春は花。梅椿水仙ハ勿論。其外木艸なれ。日
当能窓の下。又ハ陽気迎く。暖か寒る所へ。囲べし。水凍る
にほろて。花葉枝茎も凍て。水氣通せざる故。痛み萎び易
し。殊に。枝葉も剛くなりて。採まハ折まじ。寒猶物
と。水仙抔ハ。別して悪し
○いばら木瓜。石榴花。抔ハとげ針をよく取捨べし。又

百合の開花ハ。蘂をえさみ捨て活べし。仙翁ハ折皆。花
の裏ニ。虫有之。桃の枝ニハ付毛虫の巣有り。何連も能
取去遣。有風筋よ宜し。毛虫ハ子生長する者也。活花能く
改ヶ活ハ床ニ移べし

○夏の菊ハ。採と其付根を焼。或熱湯に入。後葉水をして
床ニ移し活べし。夜分朝夕ハ。水深く活置。昼の間ハ。古地。板の
間抔に。初の如く串して。移せ可べし。水打事も能く繁
なれバ。葉むれ腐易。但秋也も風強き昔ハ。移し可べ
元床に移せしも。如此すれバ保久し

○秋の菊ハ。採て直付活遣べし。能水を揚る也。されば
二岐三ヶ岐の。長き枝也。ふし繁き所ハ。夏秋ハ艸木等に

水揚がらければ。其一所を。能く打ひしぐか。又ハ折採かきめ
を去り。其本立ホ違ひ能水を揚る也。但葉ハ水にひたさざるがよし
○夏日中採に。遠方より取寄る事あらバ。草木
共に。笹草枝共青葉採に。水を打かけ。更に花葉を纏
其上を。莞莛ゆ揃の類にて。包ミ。白地に。日にあてざる様
に送りし日に。厭ひとつべし。其日向を指て。其花の陰と
なる所へ。直ホ水を灌べくんバ。暑冷る所に熱気をさ通
後すなに。送水をし。又ハ茎の首際をひしぎ。暑直後引出浴
直干。様らく直せ。花の浴萎得ホ得て勘無なるべし
○草花ハ採扱内ホも。手が熱みて。水かちさ茎ひ弱し
ゆへホ挿入れる間も。打く露を打へし。挿上手を引て後

魚肉の水と。同気相求て。能活生する所なり
○冬に至ば。遠国。他境へ送り遣ハ。箬或菰莚多積杯に。
篭重も包みて。よく風寒の通らざる様にして。送り遣べし
水仙ハ勿論。其外とも。菖蒲葉茶杯に至迄。送物ハ蒼朮
を能水あげさせるべく。後箬或太竹を。割合せ。其内に詰
目張して。其上を菰莚杯にて包み。送りハ十日も。廿日も。
苦き事なし。尚根を損る事なし。又梅桜の類杯も。二日斗もよく。
活めて後大根を長さ三四寸程に輪切にし一ツ穴を並こと
水に活け足る事にて。箬に詰送れハ。五七日位送る中ハ損ぜ
沢行抱え。又ハ三日の雨へハ。厚紙を志めし。根を包て送るよし。何れ
答手用を撰て送るべし。尚時宜に随ふて節気あるへし

○艸花活ても水揚ざる物ハ。根を焦し又ハ熱湯ニ移つけ直ニ冷水へ移し。赤茎割き物萩桔梗ハ湯ニ而活直もよし

○活にても葉多茂き艸ハ水あげ難し。是ハ水中ニ而葉の茎を塩ニ。二葉も三所ほど小刀目を入まさくべし。又心ハとみ通ふすもよし。或ハ火ひしぎてもよし。熱白艸木ニ。枝葉繁茂なる時ハ。是ハ水氣登り難し。故ニ三分一或ハ抽により中端も。よんげある葉ハ取去べし。蕗るめハ水あげよし

○撓て折易き物ハ。火ニあぶり。或ハ熱湯ニさし入て直ニ冷べし。尚太き物枝ハ。撓る場所ニ。其糖ニ漬て。能おさめ。漸撓るく頃ニ。花巾ニて包ミ。氣力を好くみ静ニ撓替持直て後。手をゆるめバニ。冷水へ移しさむるまで

待てあげて。揉もどろ次。又火にて花枝をる物ハ。糸に
く。逆に屈めて。火ハ直るなり。木の類ハ。打違かけても水
をあげるなり。尚皮目に種々傳方多し
○蔓物ハ。前夕に纏ひからみたる茎を。思ふ程にきえ
ち茎をつき出しさけ置て。或ハ前晩に剪置。翌朝。挿瓶に
根を束ねて。水深くつく程に活置よし。井戸泉水桶乃水氣
の淡き上へさげ置ハ。弥葉きゝにひてよし
○茎に竅有物ハ。何にても。花を先に水を後にさへて。蓮河骨の
萎易き物とい又。其性の緒に全体を短く剪て。水廣く。深き瓶に
勢長をとるに生よ。水中へ挿入て。花と中子葉にハ。多分の保持之外害
ひ易き色こ有れた器を　細用葉ハ外何にてゝも茎 高く淺水にる保持別傳有

○薇ハ酒ニつけ後水ニ移し竹の葉ハ塩水。砂糖水。又酒ニてもつ夜つけ置て後用ゆべし然ども是ニハ一時計後ささ之其保方別法有之

○葉蘭ぎぼうしゆ。芭蕉どんざく。鉄芦。萩。蒲。茜。志やが。檜扇。一ト通りの類葉先延ひ。或ハ盛てこれ悪わくハ葉形よく目隙さる根ニ水ハ影ち縮ひ見ても宜し。助書の害ニハなかるべし

○え宮國杯ニて瓶水凍つき易き所ハ瓶中ニ硫黄一摘入置し大抵ハ拒くむ之なれども宝の温錫ニきよれは一概ニのこん得置すべし 但豆鹿の汁を御加ゆれハ不凍ともいへとも是ハ清らしむべし

○水凍る頃ハ竹花入ハ勿論磁器杯も割け損る者之中ニ水持の。銅の筒を入まじ竹の器ハ霜月より二月迄ハ見合置し是ハ其用んと

なるハ其事勝ハ。甚不水を持て。除く仕舞て。室く置て
も裂るき物なり
○花を育ふ水ハ日々新ふ遣て別て夏秋の頃ハ時々ふ与ふ事專一なし
水ちゆまハ。甚暑ふくされ易く。花葉ひ早し　但水ハ雨流を至上とす

○室咲仕様ん覚の事

○都ハ冬ふても。室咲深山ふ出次者ありて。花ふとめども。遠去
京国様ハ其时花の物まてを咲ざれハ花ふ乏し故に自身室を
求て咲せ開べし　但定花の麴室之梅棣辛夷桃連翹様ハ其外
何ふても十月比末より三月迄の花ハ時物とも大方室ふまて咲へし
則仕様ハ大抵蕾の顯れ見ゆる根よき枝を撰置て不用る
る悪き枝ハ除去り挿るき様ふ拵へ。小枝を摘ふ揉よせ

藁にて結ひ束べし。少く枝打まじ損じても。昔がく咲きむ次の年ゟ
ざる根に。暖なる所へ置。雨日ハ水もあげさせて。後室の麹の
室へ桶竹筒にても。枝打直なる水につけ。貴於三百歳五七
日ほど。花の咲きを遅くし。むく糀の多き室程よく暖之。又麹室なき所ハ
土室窖籾の内へ。風爐に火をいけ薬釜をかけ湯気を室の内へ。
籠せてもよし。但火気の直に洩さる様に。釜と。風爐とのあひだ。
紙にて張ふさぎ。湯気計を出すべし。又大なる箱の外を藁にて
囲ひ包みて。内に。小風爐。釜と置。箱相應に。湯気を出すべし。
其の上に。箔を置もよし。尤火気の洩れざる様に手當致べし何事
格別にて。當人勿論と斗に在べし

右此方傑根の芸揃九ヶ一を出没此外秘事口伝多し畧之

花溜手桶
花溜瓶
蝸牛足竹筒
花鋏
小刀
鋸
鉈
削臺

○席上諸傳箇條首尾目録

○挿容謹傳箇條首尾目録

○蘭乃事 附葵杜同様の種
○女郎花の事
○蓮九品の事
○水仙の事
○季月配当巻寅の事
以上十五箇條尾の巻
○口傳諸箇条同断
○松休接の事
○出生見分の事
○色艶不言の事
○加持祈禱の花形事

○竹乃事
○川骨の事
○紅葉乃事
○草木水揚の事
○萬年青の事
○大小應分の事
○三躰長短左右定類の事
○添除順逆納の事

○婚姻真の式飾花の事　○真の飾三具足の事
○釜掛盤板長短の事　○竹筒墨法十二等の事
○花臺高低寸尺の事　○釣瓶上下寸尺の事
○薄板方圓厚薄寸尺の事
以上十五ヶ條口傳證說
○別に濫觴此一軸有之家に不絶
右箇條目録の巻とし、稽古の厚薄に隨ひ熟練に
悉しく以身を任お修するも許之也

○活花棲説問對

○或時進友。永壽といへる人。来て云。我多年活花に志ありて学びむ事を欲すれども。兎角世業にいとまなく。唯流に思ふのみ。然ども空しくやまむも本意なければ。此頃長秋に友として。難きの書一冊を求めて。窺へば。唐子書には。傳説のみにして。巻頭是有物は見當らず。亦倭集すれ。図も多くあれば。流義々の秘するにや。言辭変り。傳説あも。迄くなくて。不審のことなり。何れか是。何れか非なるや。責て。其趣斗も晴れば我輩なるらむ。願くは告玉へかしや

答　唐の事は。いざしらず汝が御國の茶は。師の傳へあることをなれば。何れも。棲みべし。人の是非を論ずるは。亦ひとつ

の是非之を定むるより楽学且味ずして。他の事をさゝなり。然とも降て。近世となりてハ我が頭り得る所の題ハ。需に応して著る者也

○和漢口伝の糸附流行変化の事

○我国古。世に活花を翫こと。僕漢流より久し。就中此国ハ。寧様の余化に随ひ。近き世別して。流行し家々傳とひめしを。趣も異なれハ。故に未一に入らされバ。容易に知るべからざれバ。亦中華の人く秋。持とる古伝にハ大古高低謀岳備仰斜正武蕃痩高對一律衆続等の制禁を先として。枚箇の取も是。又ハ一定の葉数なし。とりもく有て。前て口授秘傳などの法ハ見くバ。其数ふ所の物状

しより。節規準も備はらず。世の変化にさへられ。自ふし
られて。就ふ人も稀に我ゝ家元のかきを古伝あるまゝを
空しく秘めて。他にゆることはすなし。然るにても又花徳翁
ならざるや。終に室町御所にまゐて。賓客抗請の設に書
院荘厳の具となしまひしより。粗その道起り。或ハ古伝を異に
し或ハ流を汲てより。尚御世太平の恩沢に随ひ。京家
門を分ち。事業に開。婚姻娶賀の式より。朝会相語
の席に至るまで。貴賤都鄙遠近となく。活花とゝて饗応の
一助となし流に属となりて。用ゆる事広まれハ。手法
も均しからず。恐ひ傍輩の論をとや爰に秘されハ彼所
に顕はし。彼所に秘まるも爰に顕す。業手法ハ一なれとも

流は様々変りて雅俗の声は伊勢に浜荻といふの類多き
所につれて名の変ることなり。みな目前の常なる事。惣て物の
大要は書を以て伝ふれども。夫しの術に至ては。書不尽言。
不尽意とて中々筆を以て述ることあたはず。唯習ふ人の稽
古に対して。其意味を告るのみ。是は何處とても変ずべし。則
家とて伝とはいふなれ。其故は袁宏道の瓶史に。不可太
繁不可痩と。其制は禁ずに。文面にては覚ゆれども。繁痩の中
庸なる所は容易に察し得るに難し。敢て其道を飾るも
心高の命し。秘事は伝とせずや。微積て其場に至りては
自ら得し悟むべき。既に聖人の教にも。吾無隠乎爾
と曰へども。其人の器量と。執行の位になし。説伝くまひ

て。爲民可使由之不可使知之とのたまふ。釈尊も衆生に

へ。極楽十萬億土と說たまひて。又。於此不遠と宣ふ

是佛の方便にして。以傳西授以心傳心の旨なり。去佛國

の教も神代の昔より。神告神徳に有り。皆是神秘に傳

ふあらばや實と偽をはへきることなり

○花葉折採の辨 附 患者病の事

○問云。或人藥木は艸は勿論雜木雜艸とも云へども。其毒

實有れ其名は別ち難に備へ飢を助け。枯茎朽木なるも吹

爨の用となさざるはなし。然に近来。從花流行し民用藥

木の差別もなく。悉く取。又は藥求毒艸をも厭なく

枝葉根を集め。凡香色形様に愛でて葉不折捨

の新ハ。めづなる楼の有てや。未だ得ばといへれども見ま
け麩ハいらざるものや
茶　茶使ハ去られ。那ぞ一己を慰めんと好まして。奇木異草
を求め。留香色にめでて。或ハ枝捻と新古篆を節。傍ふ形
容を排りなして。神佛に捧げ。賓客に対し是を風流
と心得我か癖をとてよしとまて。流に労ざ人に誇らん
や。備茶木毒時の新しく目ふ痛まで。手に得く。実を
知ん。求めずして。能毒を知ふ為枝葉に得て。所作をなせ
しより。自らる常緑名木とすれは草の新嫩葉蘖生。揺枝
折葉に出まで。ましの眺を得く。古き里も絶に此系
あることを覚へ。四时造化の移り変りを友として失

操を。観ふれなり。詩に云人も詩を学バ。艸木の名を識ご
説玉へり。生椰艸木山野に蘢ると云ども。雨露の潤育を
得されバ。蕃生なる事能く。名ある観賞ふ給といへども。
水のやしなひを離れてハ。鬱を保ことあたはず。然ハ雨露ハ
艸木の父母。水ハ親長の君禄なり。抱く好ミ楽む所より
して。本性ひを志り然ると知。是を没。理を推。義を考し
て。父母の大恩を願り見。君上の恵於重きことを弁へよ。然
时ハ忠孝於導も是より興りむ。斯二一樹ニ不以テ其時ヲ非スニ
と孔子も説せ玉へり。屈れ機を新ち葉を摘ることを論
あらバ時と云へし。枝を折む事て鬼神に捧け。祖廟に
そむけて。蒙職を興し わとひをなさバ。追善の端と云へし

君親に薦て其意を慰め。老幼に逆へて其間を睦じ
ハ。世存を家の階とす。條を伸く茎を揉て。邪正得
失の始末を顧て其身を論ハ。数々いち争ふ。況に備ハ
もの作の法あり。又此神國より。一年の始を祝し。松と竹
との標を立て。粗常盤葉を折添く。恵方を御しき君
和睦の礼義を勧め。然ハ物として数にあつかるなくるし
て忠孝の道を顧そこそおもひぬ。形として礼義を備く
さらにあるし。人をもあはれも此言を察せむハ。鱗揩の流に
根と紛。菊虎の悲愁に。其夢を実ふの軌あらん。孟子曰教
人以善謂之忠。宜なる哉。爰そ當流の中祖　希尹園
公。古語を引玉ひて。人心人面の喩なるかなし。吾新し

敬文も亦然り。枕中に画く俗小人の常として世業に居
是ハ利欲にはしるのみ。或ハ移りて是ハ名聞に奔る。然る
大道小技に拘らじ。是を求るに随ひ。紗音戀慕の左
とかく論ずれハ聖佛の法、國津神の末社より我々に
教へ置るものハ三五の教訓を附属ぞ。ねむころに学びて
是を悟らハ争てか其徳なからん。斯ぞ小技として捨るを
易曰善不積不足以成名悪不積不足以滅身　釋經曰
漸漸積功徳皆成佛道とかや。然ルに小人凡夫ハ小善と
いへど益なしとして為ずハ殆んど悪を積に迷ふと伝へ一玉に
実にさることの於てをや。然ルに於て所謂大小に係し。
憲法の術を諸の善準縄の次第とも道を立る事。

天の物に所して余ある所へ孟子謂教亦多術矣とハ
外なるし譬へハ聖人の書籍を清し来りても行ハされハ
則小人佛の経論を身に負ふたりとも迷へる時ハ凡夫
なり。誦するとても世俗に於て釋して身に用されハ。流に
峯の白雲を眺むるに均し。纖細なる事も道を知て
積へハ。大数の「滴霤穿石」綆斷幹といふ漸靡の功有り或
人の歌に「おこたらすゆかはちさとのはてもみんうしの歩
みよし」とあるも是亦この道を味ひて辨ふへきことなり
大小共に志ある者の體急に積を用ゆるなり

○神佛供養の矣附繕和に擬事

○同云　世にいふなる德により神佛に手向供養の品上

とハたゞ世ゆゑ亦形容を作り法度を設け曲直伸へこむるに
よせ己を戒しめ身を慎ミ。人を救ふ給ふゆへ人ハ何世の末まで仰ぐや
菩薩を鬼神ニ擬け薩者とし塔廟ニ備へ供養の事
一とゆる故ハ佛意ニかなひて容易ニ述るとし唯華萼よく人
の疾病を愈し。或ハ晴雨を乞ひ苗稼滋茂を祈禱或
ハ畜獸調伏。怨敵退散の呪咀ホニ至るまで法を以水ニ擲
火にかざし偈を誦し。文を唱へ。空ニ散し地ニ灌げハ。ことごとく
必其効ある。佛説諸経ニ朗之尚大衆ニ至てハ。如其旨を
指て迷業ニ法の大意を悟らしめ。遂ニ至道を付属し玉ひ
しより末世ニ達の亀鑑となれり。此法国ニハ雑修
の梅色を表ス。三十一文字に擬へ。本末陰陽を示し天神乃

淳末なる萬業の實作を勧めまり。蓋く尊帝の清画を梓ミ彼。尚神社祭祀ニ用ひ或ハ頭ニかざし膝ニ携へて其実の愆を祝し。豊饒安全の祈祷の具ニ加ふ。其人君子を艸木の形状葉実の様をうつせる。詩ニ織し歌ニつゞりて勧懲の道を諷諫しまふ。孝経曰移風易俗莫善於楽と説まふ。笙鼓よく人身を養し。舞楽太平の目を慰む然といへ共。幼童戯ニ舞ひ奴僕流ニ笙鼓を鳴さバ何ぞ其惑して心倍楽の和を與さむ能を擦り而ふるゆへんぞ。琴瑟笙鼓の大小ちに燧ニ隨ひ。安得詩歌を記し。淫深綾急の優艶なる音声ニ変へ。隨身準縄を為ち。君子の行ひを遮ひ物とし。鍾鼓声律ニ調和し。人情の感る所ニ繋しく。

和して亂ざるの法なる所也。故に擬諸其形容象其物
宜。といふ易の道をあつく。艸木の生理屈伸消長大小
不絶して。其位に能し。禮法に基し和し。勧め。其精は
致舞と示し玉ひく。己を屈し人に及ぼさしめて。
枝ら葉たる生を擬え。言語を紀し。綱目ハ自然にならへ。
縮さハたくみくまへきを述へ。ひかめ條ハ伸ひて直なり
極へ舒さハ霜を舞しさハ彌ひ。精粗本末の理事とあさん
屈信相感而利生焉と。易の教ゆかくなれハ。禮讓謙退の
極と屈伸に稱しぐ營平衍廢の分ちを。生徒に擬へ諭されし
序なりのく第に了ん。若に進學の増なるむ不導以遠不責
民之所不為とん。君子の教へ亦。隨其所堪而為説法皆

令歓喜といふ佛の道なりと。合して能く味へ。手益なかるべ
あらん哉。必等閑に心得居るべからず
○非情と有情を正に弁ず 附 三教五倫所当の事
○問 草木は非情なりとして。唯陰陽造化の変なれども実
枝葉。肥痩盛衰の節ありて。然ながら又一類に来て(つね)に
三教五倫の道を勧め。人を教へ情を導くに理はいかなる
所にありや
答 三教五倫の旨。名と体は異(こと)なれども。理は一致(いつち)にして道
の体用也。其道といへる物は天地にみちわたりて。暫しも離るゝ事なけ
れば。亦備はる物なし。中庸曰道也者不可須臾離也可
離非道也。是を大道といふべし。其大道は天道にして虫(むし)に

聖佛の教ゆる所。則萬物常び顕はる法也。春ゆ小枝の
挿むといへども。三の教を以て。せざる事なく。其の典ゆ
あまらず況てとゆる事なし。既に孔子以貴下賤無不得
と說玉ふ。佛ハ度世之道於一切萬物而隨意自在と示
され玉ふ。是万物一致なるが故に。自在也。借文草木ハ
無心。無心非情の物ハ。形をもて人と成るなり。故の書
も萬の。道經へるも。無心非情形なり。人ハ是と美なれ
とも。春ハ花と化れ自ら香も開け。秋ハ落葉を悼ひ開
落るの心。徒は小あすまや。如何なるべし人情。開落に連る
ぞ。されバこそ秋経に。草木國土悉皆成佛と說れ。又易
ゆれ　觀其所恒而天地萬物之情可見矣と有。孟子を

物皆備れ我矣と説けり。然る時ハ萬物一躰なる事明らか
けし。則形と五行ニ比されバ。縦横長短大小として。君臣
父子夫婦長幼の事ニ喩へ。参差連枝をなし。兄弟朋友
の信ニ擬く。以一瓶の挿花となす。亦曰方ハ以類聚物ハ以群
分吉凶生矣変を成し集会ひる物ハ。必貴賤長幼有らく
此上下尊卑を分つ。則斜正ハ尊卑の等曲直ハ君子小人。
善悪に偏あるの類之。故ニ心ハ瓶中の主となしく。
君臣ニ喩へ。陽を官とる。晴く圓なるハ。将ニ天子則とる
の眼なり。戴ハ妻臣を怯より法を表し。花枝を着ひの
せらく。帝らく方なるをとて。地形ニ順ふ。相ハ五行を兼帯
び陰陽の媒として。中出。三偏の盈鉄を資事ふ完甚

智者は中央の冠として。取捨となすべし。一佛の道に取を正し。在前忽焉在後といふ。顔子の高堅を瞻し恍も仏の五體有應るに似たり。到顯密の三枚ハ三才三綱の模範となせり。必一顆に帰すれば禮儀を教と書し。孝悌忠信の道を慈て。なを師匠をもつ也。尚神儒釈の道を引ける慶を傳へて。玄字ぐし。猶ひく白地に迷ば。貴とふ纔なるを飾よ顆を見。能筆にて而しく物にまぎるべされハ。天理なる所以ハ。凡俗小人の常なり。古人云はく有玉卮無当。雖宝非用。又曰依法不依人。依法不依人更是相合。能く味ひて知べきなり

○真行草の辨 附 壮容埋蔵の事

○問云世能に真行草の名有流も有り。或ハ其たるべきと

惠。而或人の傳ふ。草木は萬千変万化にして。其所極まるべし。次に其極むる所が。造化の妙容にして活きの本体なりとて。枝葉は勿論。形容にして。是の如く。求他に厭ふありて。千支字様にいへるも。皆出生なれば。強く去り難き處ある事にあらず。然に真行草との形を。取極る時は。形て折曲法。出生を害ふとて。更に人作を加へざる流有り。是等はめでたく伝や

答　無き法。有る法。皆一事にしてはいはれし。夫々の趣有るべし。且其花は物の始め。実は物の終る所。物成て名なくんば。何ぞ是れを識るを記し。其道の枝折とせんや。扨名は実の賓にして形の模なり。則真行草の三体は自然の姿。九体と変化を示す。別に出生を離れて。求むる物にあらず。次鑑すべし。

曲直を顕り。初中後の三躰をと。猶的（めあて）のごとし是年月の刻の
名をぬしかるがごとし。素（もと）より此三等にて他花躰の態（さいうたく）の態
覆（くつがへ）しざる物は。三是に依るべし之。実に於て万事能の数を表之。
故に一瓶の内にも又人の載（さい）相（がう）の名をそなへ三枝を備へ設之（ちやう）
東坡曰真生行（ハ）行（ヲ）生草真（ハ）如立行（ハ）如行草（ハ）如走是未の書
替とかは。変化の理をうへし。緒（さて）艸木の姿千変万化なれば。
出形極むへからす。其揃ざる所が。造化の妙容にして。活花の
本躰。これを十文字にも。出生なれは請しく。強てよしとも云
や。花形に出生を痛ん。常にして其植物に。或山野園邑（らうらく）を
所々に行て。眺むべきなり之。然る躰（りやう）見てもたむる也は。性（せい）は背（さむく）と
覚えしにより。横へ出る枝とも随て直ぐ。竪に出る枝とも

様くへさし入ぬ。壇場表裏とも考へ候。唯水に育して。於
萎せざれバ。出生なりしにはなるにや。夫木ハ今く。文質野俗
の殺ハ。人紛を免し一驚に。使くえし者之。凡物みて能なく。
形有て用足らさるハ。喩へバ猫にして鼠をとらず。犬にして賊
と吼へさるハ。無益の甚也。左様なる獣ハ飼に足らずなり。
古人も戒め給ひしを以。何ぞも推斗へし。亦自然と生じ
する源ハ活きの體。人法を為人事に逆ふる所が紛きて困之て世に
生有て。活きを殺ふ人。何ぞも出生を惡むべき。然共系の
事皆ききか形の物ハ。生まずも同なるにてく。悪き物ハ雅も同なる
見えるしば。是十月の根なす十年於指なりして天眼と云
慮し。善と悪と悪る来るの境自ら顕れ。取舎の分ち明之

同じや。古語ニ木実盛則披枝害心識形る哉 此言葉。今
目前ニ樹木高くして。梢大なる時ハ。獨り其根を覆す。枝
條秀て長き時ハ。其幹を裂く。草草強て延れハ。茎自ら
折け。枝葉繁茂なれハ。殆と萎ひ枯るゝ之。甚高低繁瘦衰
源ハ。各天為ニ従ひ而来り。夫まゝに又深理を熟れハ。其述
也。況や花を雖ち瓶上ニ揚るに於いてハ。皆識の度量
なくんばあるべし哉。是一瓶の姿にある所ニて。たゞ屈伸
上下揺動ニハ皆自然ニよるの之。大凡天性草木の容。枝條東
ニくずれハ。梢必西ニ昇り。或南ニ偃ハ忽然ら北ニ帰ひ。縦横
斜正否傾表裏。左流右顧前俯後仰。速ニ造化の題斯
のやし。爰を以て法ハ自然ニ則り。形ハ出生ニ準之。既ニ天

地の廣大なる。人情の限りあらざるも。諸て弁すれハ僅に六義ニ辨ずれバ。未だ限りあることを聞ず。萬物とかく草木の形に此くしべハ。八ッ手てふ六義や六辨に至へきそ。是皆其方角を設る大綱なり。師曠之聰も不以六律不能正五音と云孟子の譬へ示さん。其理を明む為し

○曲直凝泥の弁 附 稽古に得の事

○問云人の手ハ生りやうさき物にて。直きを見れハ直く曲ると取れハ。曲るなり。必凝泥むにはあらひ。癖つく者なり。是に活殺ふ也。枝葉まで常に直なるまゝにてすゝむ。是に手るを伸す。伸ひるハ心あざるがよろしへからし。竹なれ共松蓮根の直なる物ハ。先曲しくするに結ふれや

答　いかにも人情ハ偏りやすきものにて。朱に交ハれハあけに
なり。善悪友によるへし。人の心の邪正ハ行ひに顕され。
氣の強弱ハ形に出つ。思ひ内にあれハ色外にあらはるゝ
と。古き言葉にも見へ侍る。然ハ一時。一興の物といへとも
又恥かしきことなり。去なから雅ニ其の形に連て。人情の
偏より癖つくと形ニあらはる。ちかけつり失造る郷の。人に偏りて
行ふ出れハ。誰か之を制る所なき。夫是深くそのしるし。己らん
ふあつく彼にあらい味ちの強弱ふよるなり。亦去形も
大小厚薄曲直多少ともに。各趣キへきこと。曲れるハ勿論
直形るも。僅りに真直なる所。外の枝に浮ひらぬれハ。亦曲
直るとも増し。実に。水至テ清ケレハ即無シ魚。人至テ察ナレハ則無シ徒。枉テ而直ナラス

定まらん。聖人の言ありて。一事一物の則あり。直ちにこれを
其裡有事を察らし。今流に都鄙。活花を概ね人多
けれども猶閑孤寂の友とし。楽者少なく。唯人に迎へ
見せんことを専らとする流多く。其所ありして譲らぬ人く
の。猥りにわめてこそいふどくに傍面目として。いよいよ言葉を
先きまとし。形外美麗なる姿を事とし。殆本意を
失ふ者鮮からず。是等の人々の心ハ。曲直の等不に
あられ。太他に関むことのみを索る。俗情の乱れ易
より興ずるにあり。花名関はず。其形をあげむの一方なれ
ばこそ。猶く其跡を顧ざれバ。僻み流れて。実意を忘
者之大小等耳を取し。理を無くされる。其道の奴と成りて。

人の笑ひを受ることあり。能く考ふべし。總て草木の
曲直ハ造化の自然。竹の直なるも竹の當然なり。又
梅の曲りたるも梅の意にハあらず。其外山野溝池の。用
木雜科といへども。皆時々節々に其様に隨ひ。出生を先に
生を強くとし。深く無心にてなしつべし。美しの姿まで却て添
も不深なるべし。枝をなくのびらるゝことなき。蓮の直なるが如
せし人ハ。君子にして。茎より。枝を生ずる事を嫌しくこれを
小人なれバなり。老子も曲則直 枉則全ると說あつまる
曲直ハ陰陽始末。其のよく屈して物を取り。伸べて能く載る
如道と似。気を通し

○瓶中種々降伏の辨 附 長短詩歌の事

○問　立花ハ一瓶に幾種。幾本に限るべきや。瓶史瓶花譜
等の唐の傳ふるハ。二種三種に過ざるよし。或ハ一本にてとし
亦二本なれハ。麻雑をもつて傳定ふるも有り。或ハ稍草花
ハ論ずべくあれバ其品ハ数の極とするも拘る所。何種にても
唯抜はしく入て宜候や

答
いかにも二種三種に過ざる事也。大要其等は越る。
條譜なとに違ハざるべし。立花ハ甚壮状の全き也。穏をんと
せバ。先一種にかくの如く成る所。上下陰陽左右屈伸に慣ひ。花
葉相對して。生立る所ハ計まへる所。又二種三種とても麻
緑葉林を以て傳ふることを為し。亦一根を以て一瓶を綴へ所。
何ほどに二三枝合して寺轉を奈何べし。或猪祭子て下

支那の説を採出たるなるべし。今當流に傳ふる所ハ。先ハ芭
に桔梗ふしなるべし。或ハ萩にりんだう女郎花。亦ハかるかや
小草の類を初めとし。害草ありて出所相違物ハ二種
三種續く五種稀も。形状繁雑ならざる様に纏び。夫く
の趣を顯すべし。則瓶花の本意成るべし。都て叢簇と
して事とせん。彼唐詩の數行。我國の万葉集の長哥
のごとき。天地山川四時人情ひとつとして述ざる所なく。一
句一字も儀に叶ざるハなけれども。甚事繁長にして
意味深く。一言に寡して當れバ。都て結耳にハ。五七言
の絶句。三十一文字なり。味ひ唐きに似たれども甚遠く鎔能
詠人なり。且みつかなきに似たる境を讀學未熟の上に

さいへ及はざるとも。ゑまてるにはくらぶるべし。茶の道の仇ありて。必鬼神の悪みに逢事

○同流異称の辯附本末傳説の事

○同じ世に流布する諸流は。多分茶家の傍流なり。然に。其形は自縁法式もかはりて其茶道には拘らざれども爰にも末など汲者。総じて本末虚実を争ひ。甚しきは奇怪遺恨を挟む流も有。是等は如何に侍るや

茶器他は其に流を寄せて同流同流と云。末々にいたりては香水上きけれは。由名實有るも有。或は始祖の傳へを失ひ。徒に私説を設け。古傳と名つくる抔。其名一なれども權実あるも有。或は形状異なれど式法均しきも有。

志其名を續者。流末とハなりて。實ハ其時く先達の
高弟雅俗。功者ゟ功者共にて。面々の手癖有て我まゝし
易き姿のまゝと。業として人ニ傳る故。後学ニ其轉變く
一集せさるなし。何事も時勢の癖ニ流れで。其本を
失ひ。後ハ友錄ひとなる故。争論止さることなし。甲乙
を省へし。然ば務者といふゝ人を紀けれハ。仇を結の端なり。
殊ニ自他の未熟ゟ我ゟ不調法にハなかるべし。我ゟ能まで
我ら徳。人尊はならバ。猥ニ誇ることなかれ。已ゟ初ゟさ佳
事探ハ尚以也。唯手前し不足の薄弁ニ掛。師祖
先達く活名を續つる次。今都鄙皆此枝を擬て。事の
蓋護する所なり。先達行ることの數多出來て。中ニハ語

業の為にし。或は名の聞えを求めるとして。初心未熟の
厭なく。秘事を授け口傳を受て。猶物をむさぼるもの
ともなりぬ。其傳授の先は偽はあらねども。名の拙きものへ
よりて先達は。師と称せらるゝの法猶なく。学者は價なし。
秘事を買もとむるに似たり。彼には弟子にも又の道を
失ひ。其所よりして。適ふ一傳を得れん。萬良也道を遂
しまるとも。經迚に偽しては人の余ふ身を語り。誰よりも傳へ
己が未夫にも先生と称せられんことを欲し。考に従を集て
名聞を専に自家を事とし。或は利欲を先として人を
欺るのを形し。終に其事を未し得られずとて。一旦の
虚名をして。却る其道の實意を失ひ。恥をひ残せる

者也。抑師ハ。以軌にして人を教ゆるに。道を以するに稱号
なり。戯にも先達師と呼ぶ。字義に二ツなれバ。遍く
をも恥ち愼しむべき事也。凡大小高下となく遊藝手
技の常として。秘事口傳と云事有。其者の執心に随
ひ。技術の位に應し授る事なるべし。然なれど初心
未熟の輩なし。口授秘傳それ是を先に與へ人としたる
者なし。大方ハ我々藝の未熟なる所より教る業淺く先
達の器にあらざるを人知り。用ひなしと恐れ。或
同業なる人をも秘きてと目の礙り。捨ゝ守事をもなれバ紀
亦は利欲に媚ひ諂ひ其人をもち其人を擬き止かん
為にしたるにや。夫等の先達ハ必初心未熟のともがら

譎懈不実を勧め。児輩童蒙を誑惑し衆事悪事を導くべし。歎かはしき次第也。抑活花の翫ひハ風流の一事なれバ。必花を専一とす。花瓶器物にも。深く好ある事ならず。況尚茶室の花ハ古人より。連綿として其趣有れバ。夫々の門に入て学ぶべし。今書記せる所の花に至てハ。唯其流の名のミ傳る者ならや。其趣意ハ其源をよく〳〵聞べし

○實物常盤葉を用ゆる弁 附 縫斎の事

○旧云或流に傳ふ。花散て實となりし物と。花なき常盤葉の類ハ。活花の賞翫なしとて用ひず。亦用ゆる者ハ。必花實物を交ゆ。別て剪り株指枝等物抔ハ。嫌ひ用ひざるなり。是等ハいかゞ何に傳るや

答 夫にハ其門の掟あれハ。其流にしてハ兎も角もあるべし。
敢て倚子論る事にハあらじ。去形ちる。其志にありけし哉。
秋の野山乃みかし紀。江糸の青柳。岩磐にの芽ぐみ出る以後
生もる萌草の姿ハ。優ともとまへるも珍ぞ。争でか是を
めでざらんや。亦風土につまらくちよとほしく瓶裏室りむより
ハざれる枝。ひ結びたる梢にあるも。夫々の容に任せ眺むれ。
孤寂養意の一友かくるべし。唯飲ふべきかれ。穀実莫氏の趣
のみ。其外事に随ひ機に應し。為慈禁忌の品ハ。別に一箇
に傳る。年寒うして松柏ハ遅く志おちし。君子も其徳を
蓄めおひて人を勧めあふ。尚雪の下にもと。萬年青や萬年草
地其乃都不。青葉紅實の操正しく。其色を保てり。何そて

此類ハ香さへ黄美ならざる花。古哥に「あり」みどり青葉の
陰に靡くら川ろふちをも房にこぼるゝみち「ちえ」みを引あき
らかを青柳の糸てかゝりてけふもくしつ是皆其々こ
かへしこゝろなからぬや。又「香こそあれ」ハ香こそもりせる草も花を
妻に志てれぬ花さへ咲たる萩なき猶も亦のうきまた枝葉
を思ひ。色なき枝葉も容にありてふ。芳をふくめる風情あ
抱こと窺きゝる所より満らしむることを。思ひめぐらせハ。尚余情
ふり幸事をとなるへし。蔦桜ハ琉璃蚌なり。花ハ篭子。月も
隈なきをのみ見て抱かん。はさ咲ぬ房さきおとよ稍。ちり落
まてをも待庭接こそ見所おゝけれ。望春の人傍なきをも。
千里のかなたをながめるよりも。咲ちかくなりて待出らるゝか。

いとんなりぞ。さて月もさハ竹のこ。目あて見る拘りハ事ハ宗を
立さうても。月の私ハ室ゆうちなうゝも思へることそいふお
ましう杉しかれど。世まして八直なるこ之唯賓客指請の
栢ふこ議。求てもあきら器を入ざ。主の介そへ談うして饗應
許設け薄これ似ずらり。是ホ乃節子こ議ハ又格別ム得き者に

○響古虚實の矢 附 殺活得失の事

○問た武人活ちハ立花と違ひ挿(さし)入りて手轄ら事一なり
も別生習ひも是なく。唯射しの木草乃風作ふ随ひ。面白く
の気象(きしやう)に任せ入て。自然ふ面白き姿出来る者なり。今ハ
昔と違ひ。去形巧ふなり。花瓶あ格てゑしくにあゆる如へ
必器物をこ害ふらゝ有。それハ唐の活花ふハ瓶内物を設け活

生ると見へたり。多くは毫筆の強者。自己の作意を専らにし。臆説
を構へ。枝葉を折曲け。種々に責めなやまし。無益に隙を費し
なしては常せし抄もなく。纔か小折攪て捨るのみ。斯ては活きと
いふて。軽ましく見なし。唯花を一時の興。心を労しては目を慰
るの。情を害の弊となりし。古へ陶淵明周茂叔の人々は。庭
草なく活かずして自然の姿を愛でられしとや。是を以て世を
愛せしる者なれ。今も尚是等の趣を則とし語られき。さ
ることにて侍るや
茶いふ事も近来の古は流行にて長し。未くの親ひなれば。自ら先
達ける者とし。豐鼻なる様多く出来なく。事の義理をも糺さず。
物の源はなそなる汲。偏曲奥旅をなす。富貴を好き人を欺く。

修年若き人く婦女弱輩ハ。師と導して經迷が悔しく云へハ
そらち貴て。其者の行迹好悪をも察せず。妄子化まれ流子
誘引れて。其門子入ぬれハ其術の我勝慮言を。實と心得怨ち
其に合ふなれて。人を輕しめ他を謗れり。去てハ新しき人ハ也概て
論ふ事さへなかりぬ。総じて惡しき業の常として。正きつ人あれ
閉ふさまざる事ハ。理非善悪の分ちもなく。我か流のみハ概子
悪しと心得る者有りハ。諺子九疋の詩猜が。一疋の真猜の我子似さ
るとんぬ。却るかくハなりそうして。迷かくら云の類なり。是一大害なと
吹れた。千犬實を吼ゆるとのが。まべく初心未熟なる事ぞと
先学ハ。深く常子引なり。初ひ學ひの事ハ其志の非を糺子
親外遠なる様なども。是と心得失が上子尚悪き所ハ。見覺

得されハ智も亦精しからず。智くはしからされハ業の義理深
く。毫釐の違ひより千里の過を生ずるなれ。實子師たる
物縫ふる針の如し。曾子ハ随ふる事のみにしてやゝ。瑣細なる
事も。學ひ人とせざるぞ。能く其先達を揀むべきなり。先賢の戒
あり。儒文語をハ擲入さへバ。筆揮ふ揮にハ能ずして。其業
に向く何の考へ今般も多く。又規矩準縄も邪く。自己の思
ひ入以覚て剪捨て忽ち瓶に挿けど。而作とするを以て象功
者もありや。夫木ハ唯系勝放縦とふ者にて。全家功
者の法ぞやある。むだなりても論ずれども。堂上の飾り
として賓客招請の設にハ。深思不敬と云へんや。斯てハ語
花と云ふ名而已にて。たゞ瞻眠を覚すべし。或ハ此業を厭る

の外何の益なき戯ごとあり前に云如く物有れハ用有、
用有れハ必功あり。俗にいふ足らぬ人もむだ人となし君子釣
而不綱弋不射宿と。何事をなすとも殺生ハ遁まし。去れども
少にても悪を退け。善事を進むことを専くなすべし。
物事なして労なけれハあらされバ西むきとれ労を。厭ふ者
ハ稀也。然ハ聊にても労ある事ハ。益ありて世にもよけれ
惣じて雑まさるも理の重き入用なれバ。必廉恥にて為らべし
猿子。雅ハ道によつて賢しくて。総事ハ睫とて。家を得たる
道ちてハ人を諭し。家の才をも顧る者也。古之唐の輪扁か
車を作る味ひをいえバ。斉の桓公か。天下を治る。聖経を論し其
意を述る等の事を推して余ふ為し。世の笄を握て拘元

術まで人〳〵日用の執行ふして。生涯稽古ある術なれハ。何
殊に未熟ハなさけなきなり。然るに手なれさる物ハ。又思侭にハ。
取得難きものなるべし　古語ニ良工者使手習知其器而器
亦習知其手とは宜なる哉。然るに上智の人といへども。稽古
なれざる事ハ。容易ハ出来かたかるべし。慣るや夫より下業
至るハ。猶更なるべし。既に物事学といへど。好きれハ得る事
あるを以。好くとき学びされバあらさ知ることなし　何ぬ
も念入て其甲斐あらハいとゞ痛を惜むべき所。懈みけて悪し
季節ハ何程も急ぎ度し　筆の事功者になれハ緩急
遅速ハ心の侭なり。尚其上手と獻ふ人ハ有体しけれとも。
或ハ性質の強弱により。或ハ其事ふ慣り。好嫌勉怠の

達して上手と下手と分る事。骨を合て東西を行かぬし、故に斯
の枝遣を得ざるといへ得たるとも半途にして眼能百里の外を察れず。
我が眉毛の厚薄を見る事あたはず。経の遠近は行て後に悟し
其場をふみ得て其事を極るは遇也。何ぞ氣象我境を先達
と決る哉。彼屈曲なる枝葉を書院の大床に器相應に見分、数株
を束ね余枝を集、夫々の風躰をなさしむるひ積むべく争ではる
なき人適小瓶に直枝の縦横有左別もなし、二本や三本挿得る
事有とも、夫は時の偶中にして定規とはなし。又近来瓶中
に彫刻の具を用ること、此枝生る所より折くべき花をも贅用れ
ば、全く姿形も増ち自然と式法も備。此道全く整ときの語曰
欲善其事必先利其器といへり。則是等の義をも兼たり。耶そ羽翠

の未調さる時をもて本意とせを學ず又花瓶用るにつき器物を損
ずることを省べきとや夫其の義ハ茶配るにも能ぞ。其器子高ふ
さる人今ぞ其物を害ふして目前の定理之。変とい微妙のことも深き
事よくハ辛尓子得難し。然事をなし其義理を味さるハ雅にハ
父母の孫まふを喜て害ある物を薦る類之ぞ考る事実意薄く唯
上むきの汁を覚えて深く好きさる事ハ皆頻抱なく家が入用の節なり。
自在に遂れさる者之行ことゝ切磋琢磨の上にハ小理をもつて大悪を
止める帰らそて省身養意の一助とはなるなれ。知之者不如好之
者好之者不如樂之者とは君子の發擇其善者勤而行之とハ
佛の示言之。不大此發不淺る事なし。されど此をも志なくハ凡人のこ
若樂嚴ふ又有バ。一枝を取らハ必ぞこれを顧て。樹木草茎の曲折なる。

我が心意に比べ。自恣放志の癖を削れ。剛枝風に割れ。猶柳雪を凌も。各身躰の上に推当く。彼に擬へ是になせ。能堪忍ひて揉直さバ。自ら習ひ性となるに迄らん。木受縄則直人受諫則聖也と。彼南山の竹ハ岩の倚に虫なれど。亦夫が上にも括而羽之鏃而礪之其入事深しと。孔子仲由に説給ふを案へし。挿花暫時の教へとハ云ども。学べきことは故有ハ献へる也。論ずる餘りあらバ倦ことを勿れ。然ハ技知擅援の術なりて。終にハ克己の端ともなる物ぞ。察二一物一而貫二乎多一と聖人の教も尚しかり況。能情を殺て。有情を示ハ三教の旨。方便の教生ハ菩薩の済度。一教多生ハ佛の慈悲。羊を殺して礼を愛ぶハ。君子の行則仁の道すりして。各権の诣材也。彼渕明。茂叔の。人ですハ。専花を

採を拘し。天然の趣を楽しむ。故に庭艸蔓これず。蘿次刈し次
とりや。是等ハ熱烈なる隠君子なれバ那その義を受て
其身を改めむ。真に其趣を慕ふ。志と行を学ぶべきこと之唯
恐らくハ耳に聞し口に言而已なるんか。世に似て非なる物有。稗の苗
に似たる駑馬の中にも。形と嘶計り驥騏にまがへるも有。其嘶と
形の相似たるを以。驥と並ひ立て千里に行を勉んとせバ。必彼ら
奴となりて生涯其身を困しめ。永く鞭策に責を受んとなる。
必駑馬ハ駑馬の群に居て。驥の任を貪る事なく。鷃ハ羽翼の限
なりハ。蓬蒿の間を天地として。其易きに游ハ。將に鵬鳥の
楽みを拘しかるべし。里俗の諺に。鵜の真似する烏水
をも呑と。おのれが己を欺き。寸を以尺に飾る。我慢の邪僻に

くゝ海岸よりハ蟹の甲に似せて穴を掘り。以管窺天揆錐
ふよるて綆短者不可以汲深とハ君子の金言也。されハ以之
推も亦應れハ能ふ通し。聖人の教も至れハ可もなく不可
もなく歌為の道も一字不説ふ出るまして況や玉ふ乃技
なや。されハ天地ハ測りなけれハ。変化極りなく。人工
及ふことあるへき歟。横竪得失ハ首尾無して四時の環
くが如し。唯苦楽冥明ハ各甚霊ふ應する者也

古歌に

心とやことみちハまよふ共 神無月
杉まちくれにわすれぬもみぢかな

○活花通用文字の事

○生活挿名音義ハ渝れども皆相通ていけの字に用ゆ。花挿の字。義理通りれども生活の字を。俗用するところ久し。殊に不文の者も覚へよろ易し

○花滴、花押へ。古所りの名ハ。瓶の字を用ゆ是より風姿をうち。嫋へるとの義也。亦箇押への字も用ゆるも有り

○花を床上の瓶に挿ことを入まるといへし。入まるハ納なり亦左右前後へ。枝葉を扱ひ所るを。遣と云なり遣ハ随へ送るの義なり

○別種ハ勿論同種にても交ゆる品を。添物と云也 添ゆるハ益の義也。亦下種持ひ根鎮なと云なり

君擧說問對ハ中和の旨を受て經傳を則とり
鄙言を厭ハれ雅意を述め何そ斯知まうす
たるこゝろを得ひく頓しくも云ふらや於ほさん
さゝれまを知れる貴くの見玉ふことゝを冀ふ寸
原より人各志さしあれハ筆てゝ他の繩引を續き
去なうる顧ふることを垂つゝれ淺識を渡ることふ
後の學しうゝ淺見る人有て千萬ま一も採
ところあつて先師の本懐なら幸ひ那
筆に通さる者あらしと云爾

跋

大塔宮之御戴国形勇吾之字

京孫子以為之形質者也

其御墨蹟不以書法[illegible]

在耳掃蕩之功枝後急難

而様之以毀而掃之難中以

京其眼因而感之心忠於是

悵然冥忽滄飛雲而峡情
安静之中得之所之蒔
并載而還一回之至之至
東林之生者為必教人者當
叢法宗圖大事之戢之以規
能識之圖繫戢之宗學者以難
之意文心而生以後福以學者之

之仁得之國与之覺我忠等書
之心思ろ飛以様之安西日子
更子於好母於以様之如覺之
圓与思學之見母不ろ之畫之
之後話承至用因之等發之心志
性飛情能書日無憂惣情
安靜之所經日得思書同於

而又嘗患之以謂讀余之
志以公於好事者

寛政十一年己未春二月

八人淀北亭窗秋月謹逸

青山御流活花手引種（せいざんごりういけばなてびきぐさ）

桂月園泰雅著

畫工　百川子興

彫工　野代柳湖

津逮堂藏版
京都市三條通御幸町角
吉野屋 大谷仁兵衛